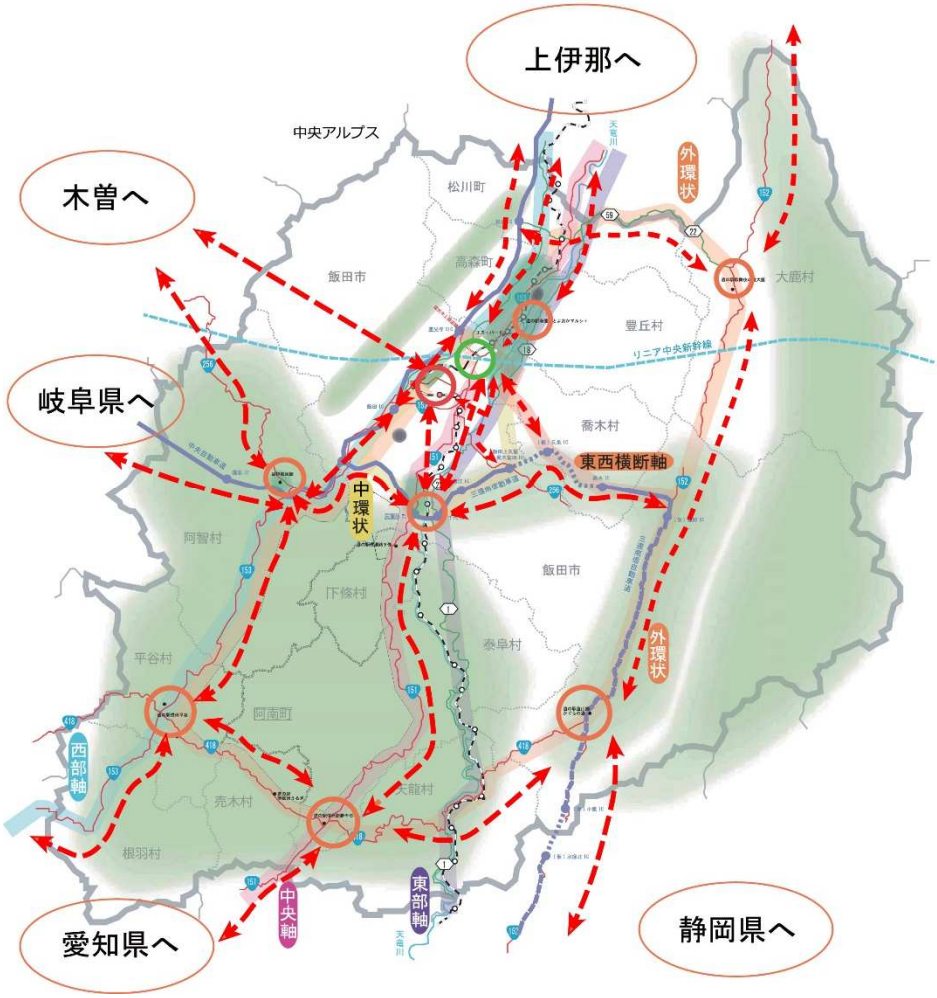
資料 4

未定稿

南信州リニア未来ビジョン

（議論のための）



令和４年2月版

南　信　州　広　域　連　合

～2050年に南信州を日本一住みたい地域にするための未来像を描く～

リニア中央新幹線が開通すると、三大都市圏と南信州地域の時間的距離は大幅に短縮され、三遠南信自動車道開通の効果も相まって、「ヒト、モノ、コト」の流れが大きな潮流となり、この地域に様々なインパクトを与えると予想されます。このような大型交通インフラ整備を千載一遇の好機と捉え、新たな交流と地域資源の拠点を形成していくことが、南信州地域の発展につながっていくと考えます。

南信州広域連合が策定した令和２年度から６年度までを計画期間とした後期基本計画の中では、リニア開通の効果を地域振興に活かす観点から、この地域をどのようにしていきたいかをビジョン（絵姿）としてまとめていくこととしています。

折しも世界的なコロナ禍に直面し行政活動が制限される一方で、デジタル社会の急速な進展や地方回帰への関心の高まり、健康志向など、新たな価値観も生まれてきています。

南信州広域連合では、４つのエリアに分かれて行われた議論をもとに、このビジョンを策定しました。このビジョンは、いわゆる行政計画ではありません。郡市民の皆さんと地域づくりのイメージを共有するための一つの提案です。これをもとにして、「2050年に南信州を日本一住みたい地域にするためには」をテーマに、皆さんと意見交換をしていきたいと考えています。

《　ビジョンの構成　》

１　リニア開通で変わる南信州とビジョンの作成
２　リニア駅周辺図
３　飯田市（中部ブロック）のビジョン
４　北部ブロックのビジョン
５　西部ブロックのビジョン
６　南部ブロックのビジョン
７　南信州全域図（分野別）
８　おわりに

１　リニア開通で変わる南信州とビジョンの作成

⑴ 多様な交流圏域の形成と「ヒト、モノ、コト」の流れ

リニア中央新幹線や三遠南信自動車道の開通により、高速交通網でつながった都市圏からの来訪者が増加し、多様な交流が生まれることが期待されます。こういった流れを地域の中で大きな対流にしていくためには、広域交通拠点やそれぞれの地域拠点の連携を促進し、ヒト・モノ・コトがつながる交流圏域を形成していくことが必要です。そのためには、交流拠点間をつなぐ道路網の整備や交通の新機軸の構築は重要な要素と考えます。

南信州の主な道路軸は、西部軸（県道飯島飯田線～国道153号）、中央軸（国道153号～国道151号）、東部軸（県道１号）、外環状道路軸（西部軸～国道418号～国道152号～県道22号～県道59号）、東西横断軸（三遠南信自動車道～県道251号～座光寺上郷道路）などで構成されています。このうち西部軸の国道153号飯田南道路、東部軸の県道１号、東西横断道路の県道251号、外環状道路軸の国道418号については、国や県との連携を図り、整備を特に推進する必要があります。

また、中心市街地を取り囲む道路軸として、座光寺スマートＩＣと山本ＪＣＴを経由して飯田上久堅喬木富田ＩＣ～国道256号などを結ぶ道路で構成される中環状道路軸が設定されています。さらに飯田ＩＣ～国道153号飯田バイパス～リニア駅～座光寺上郷道路～県道飯島飯田線～羽場大瀬木線及び中心市街地へアクセスする日ノ出江戸町線を加えた道路を、内環状道路軸と設定しています。

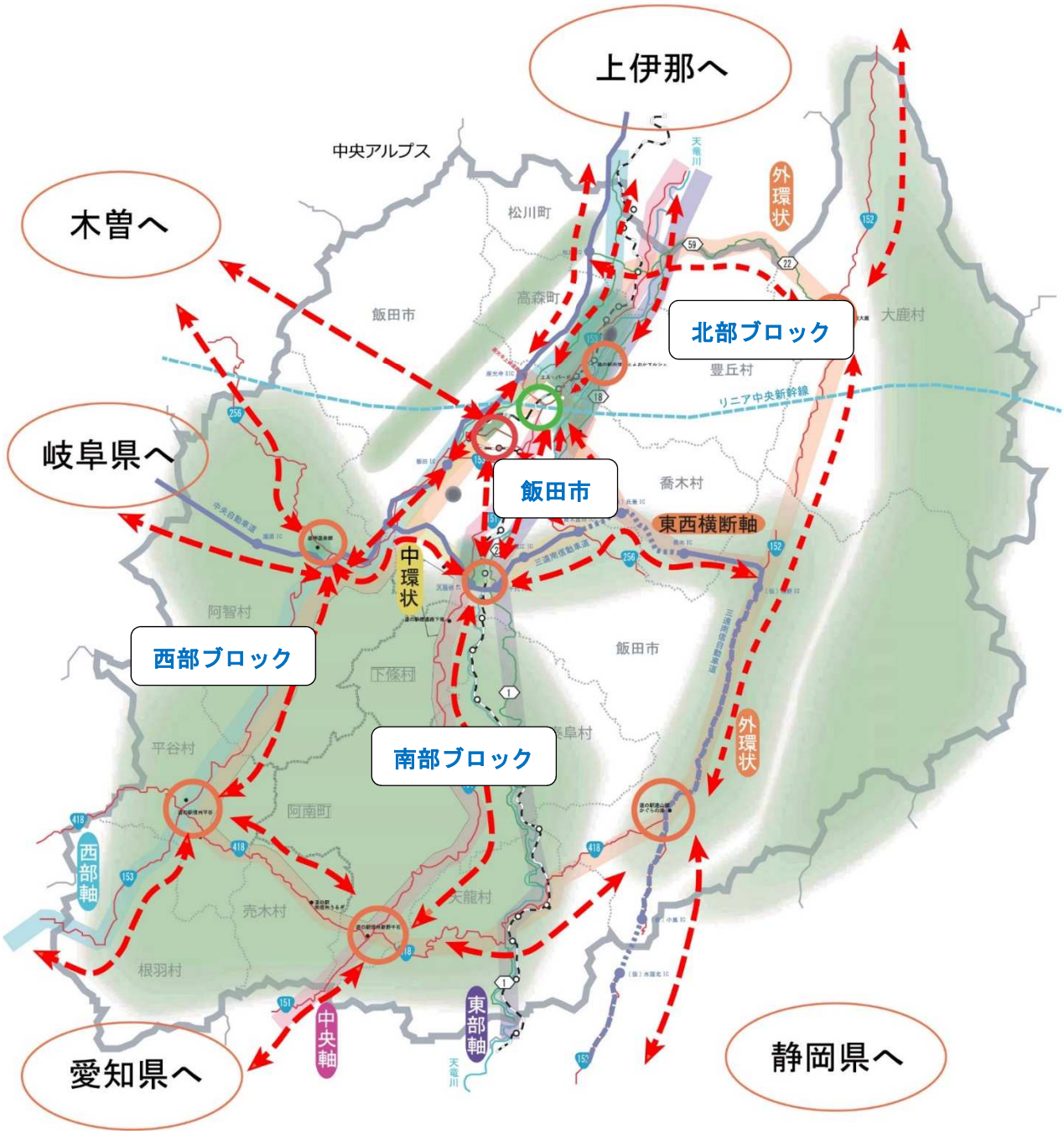
そのほか、南信州地域を南北に走る飯田線は、通勤通学のみでなく高齢者等交通弱者の足として利用されています。近年は、「秘境駅ブーム」等で観光面でも注目されており、リニア中央新幹線との連携を図ることで利便性が向上し、更なる活用が進むものと考えられます。

リニア開通効果を地域全体に波及させるためには、リニア駅を基点とした二次交通の整備を進めることが重要です。自動運転技術や新しいモビリティも活用し、需要に柔軟に対応できる交通システムの構築が求められます。

しかし、リニアの開通でヒトやモノの交流が盛んになり、経済の活性化につながることを期待する一方で、この地域の人々の圏域外への流出が進むのでは、という懸念もあります。そうならないために、生産年齢人口の増加に向けた積極的な対策が必要になります。また、地域の魅力、新たな価値の創造など、リニアが開通してもこの地域に住み続けたいと思えるまちづくりが必要です。

今回のビジョンは、このような二面性を意識しながら、どのような未来を描くことがこの地域にとって望ましいのか、その方向性を地域全体で共有するために、視覚的にも分かりやすい「未来の絵姿」という形でまとめました。

■リニア中央新幹線、三遠南信自動車道開通後の地域間交流のイメージ



⑵ ビジョン作成のアプローチ（２つの視点と７つの分野）

ア　２つの視点

リニアの開通効果を活かし、地域振興につなげていくためには、外から呼び込む交流人口を増やすだけでなく、この地域から人々が離れていかないようなまちづくりが必要になります。

2050年に日本一住みたい地域になるということは、ここに住んでいる皆さんが「30年後にこんな地域になっていたらずっと住んでいたいな」と思えるようなまちにしていくということです。下伊那郡部では、圏域ごとの議論で出された様々なアイディアを、住んでいる人が住み続けたいと思うまちづくりにつながるもの（内部目線）と、外の人が訪れたい、つながりたい（住んでみたい）と思うまちづくりにつながるもの（外部目線）の２つの視点を意識して整理してみました。

◆内部目線　…　住んでいる人が住み続けたいと思うまち

◆外部目線　…　訪れたい、つながりたい（住んでみたい）と思うまち

イ　７つの分野

住みたいまちづくりに必要な要素には、仕事、遊び、教育など様々な種類があります。これらをいくつかの分野にまとめて色分けし、視覚的に分かりやすくするため、ピクトグラム（事象をイメージ化した絵文字）でそれぞれのエリア図に表しました。同じピクトグラムでも分野が違う場合には、違う色で表すこととしています。

ビジョンに示す分野と色分けは、以下の７種類としました。

◆つながり・移住【赤】…　移住につながる外部との交流、企業誘致等（外部目線）

◆暮らし・仕事【橙】…　住まい、仕事（地場産業含む）、子育て、買い物等（内部目線）

◆観光・レジャー【緑】…　外部目線での観光や内部目線でのレジャー等

◆学び【青】…　高等教育、生涯学習、環境・スポーツ・キャリア教育、担い手教育等

◆健康・福祉【桃】…　医療、福祉、健康づくり、保養等（内部目線）

◆地域の財産【黒】…　育て守っていくもの、強み（風景、伝統文化芸能産業等）

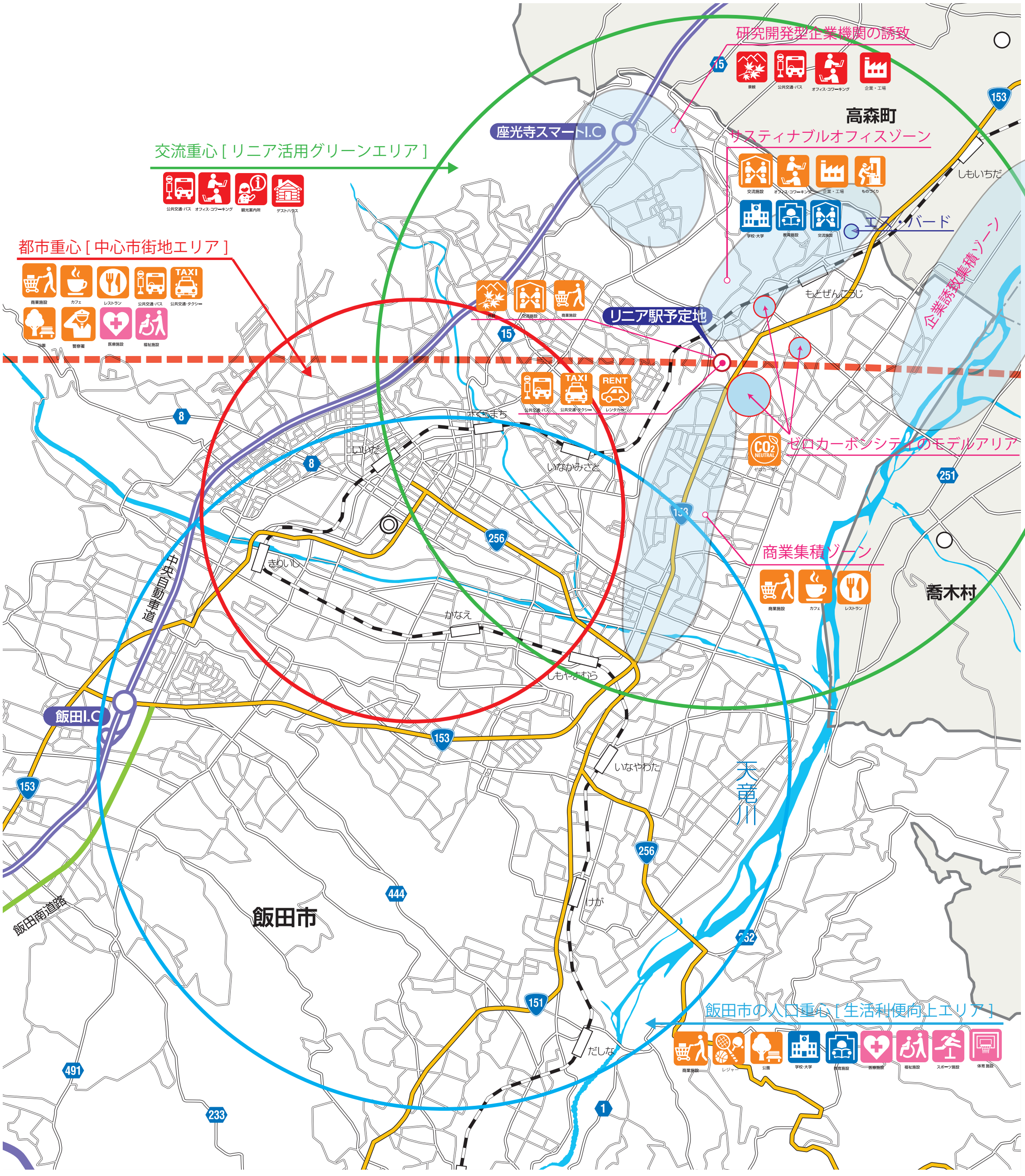
◆道路　…　新規路線、改良路線ほか特記すべき路線

⑶ 南信州地域を構成する４つのエリア

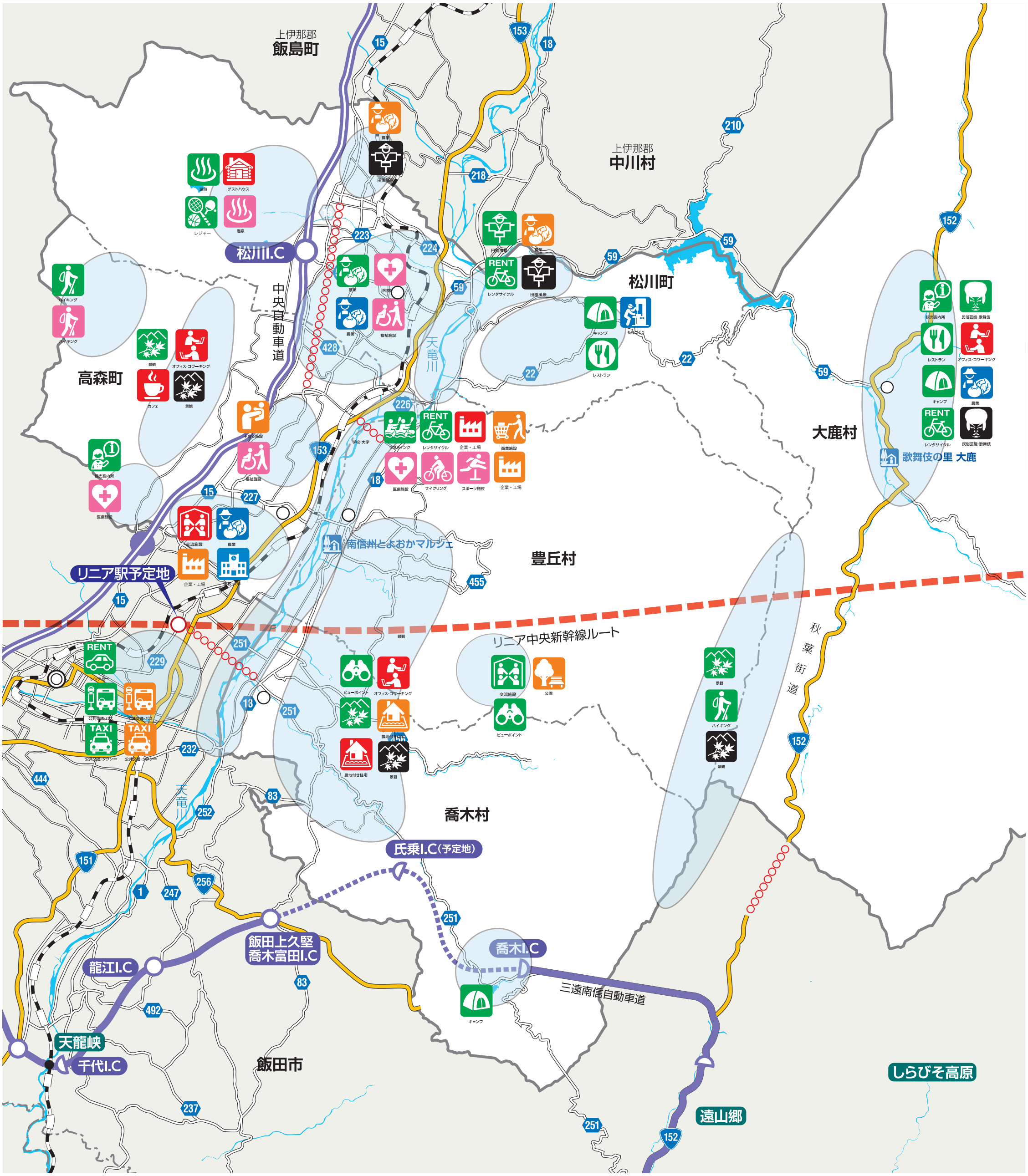
南信州地域は、飯田市と下伊那郡部の13町村で構成されています。このうち郡部は、北部（２町３村）、西部（３村）、南部（１町４村）の３つのブロックに分けられます。

このビジョンは、これら４つのエリアごとに検討チームを構成し「2050年に南信州を日本一住みたい地域にするためには」をテーマに、それぞれの自治体の枠を超え、広い視点に立って協議を行ってきました。各ブロックでの均等結果を広域連合として集約し、整理調整を行ったものが今回のビジョンとなっています。エリアごとテーマに対するアプローチの方法や検討の仕方が異なるため協議の進捗に差はありますが、これまでの議論を一旦とりまとめ、完成形ということではなく、現時点における地域の将来像として示しています。

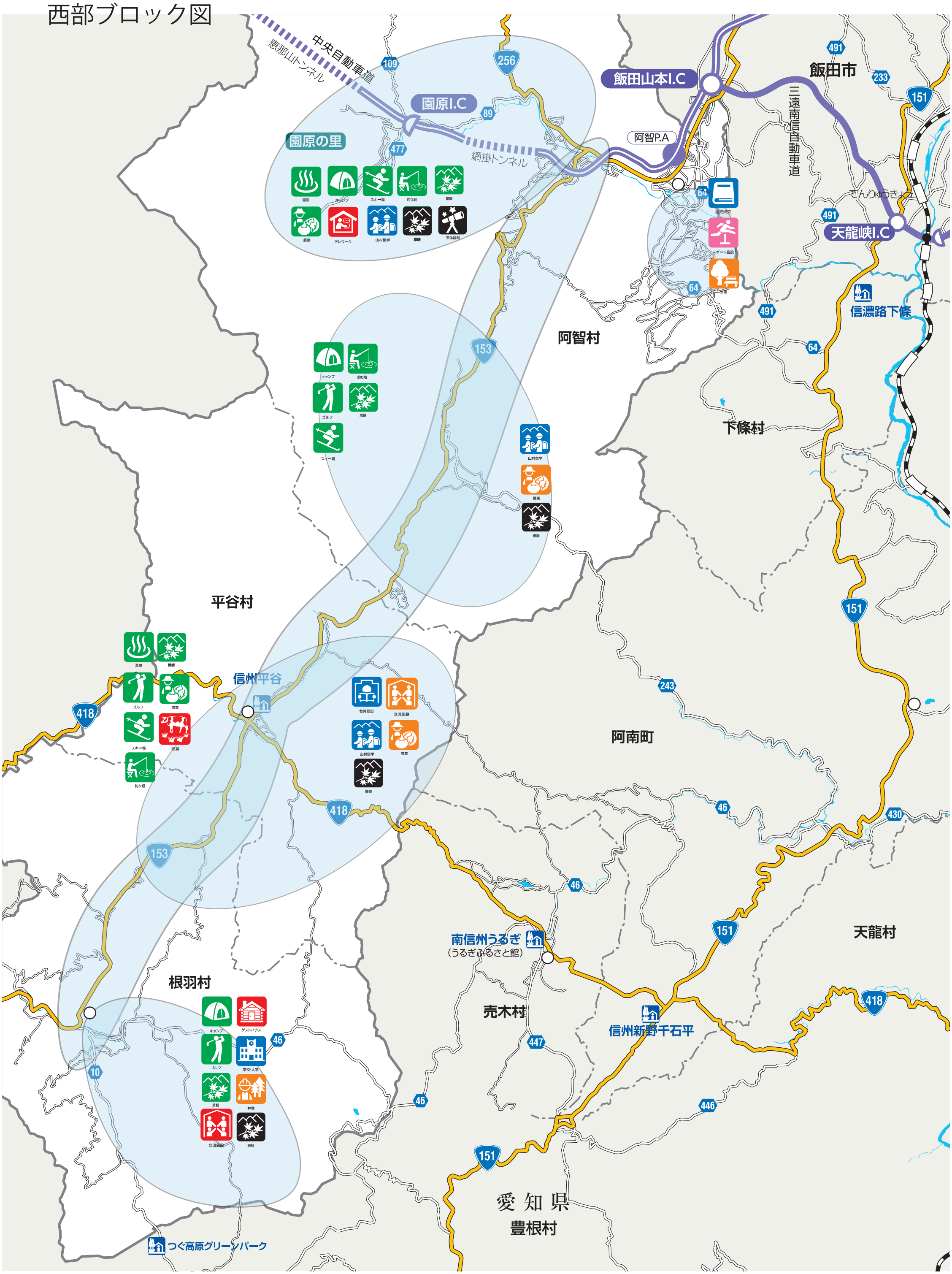
飯田市（中部ブロック）３重心図



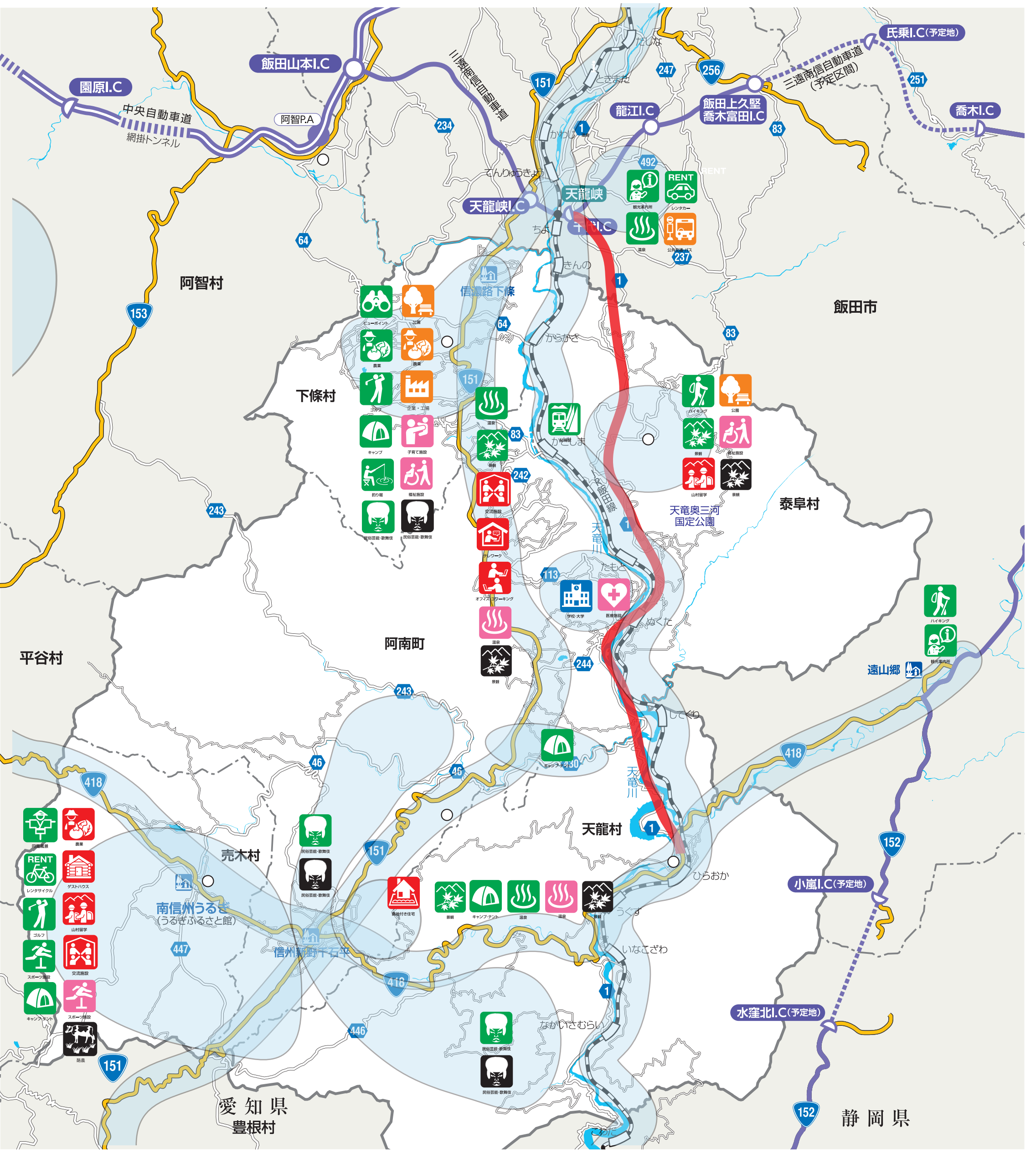
北部ブロック図


上伊那郡
飯島町
上伊那郡
中川村
松川町
高森町
大鹿村
豊丘村
喬木村
飯田市
松川I.C
中央自動車道
天竜川
リニア駅予定地
南信州とよおかマルシェ
リニア中央新幹線ルート
秋葉街道
歌舞伎の里 大鹿
氏乗I.C（予定地）
飯田上久堅
喬木富田I.C
龍江I.C
喬木I.C
三遠南信自動車道
天龍峡
千代I.C
しらびそ高原
遠山郷

西部ブロック図


中央自動車道
恵那山トンネル
園原I.C
園原の里
網掛トンネル
飯田山本I.C
阿智P.A
飯田市
三遠南信自動車道
天龍峡I.C
信濃路下條
阿智村
下條村
平谷村
信州平谷
阿南町
根羽村
南信州うるぎ
（うるぎふるさと館）
売木村
信州新野千石平
天龍村
愛 知 県
豊根村
つぐ高原グリーンパーク

南部ブロック図


園原I.C
中央自動車道
網掛トンネル
飯田山本I.C
阿智P.A
三遠南信自動車道
氏乗I.C(予定地)
三遠南信自動車道
(予定区間)
喬木I.C
龍江I.C
飯田上久堅
喬木富田I.C
天龍峡I.C
天龍峡
阿智村
下條村
飯田市
泰阜村
平谷村
阿南町
天龍村
売木村
豊根村
愛知県
静岡県
信濃路下條
天竜奥三河
国定公園
遠山郷
南信州うるぎ
(うるぎふるさと館)
信州新野千石平
小嵐I.C(予定地)
水窪北I.C(予定地)
たしな
ときまた
かわじ
てんりゅうきょう
ちよ
きんの
からかさ
かさしま
たもと
ぬくた
しでくり
ひらおか
うぐす
いなこざわ
ながいさむらい
こわた

■つながり・移住の分野【赤】

○天竜川周辺＆段丘ゾーン

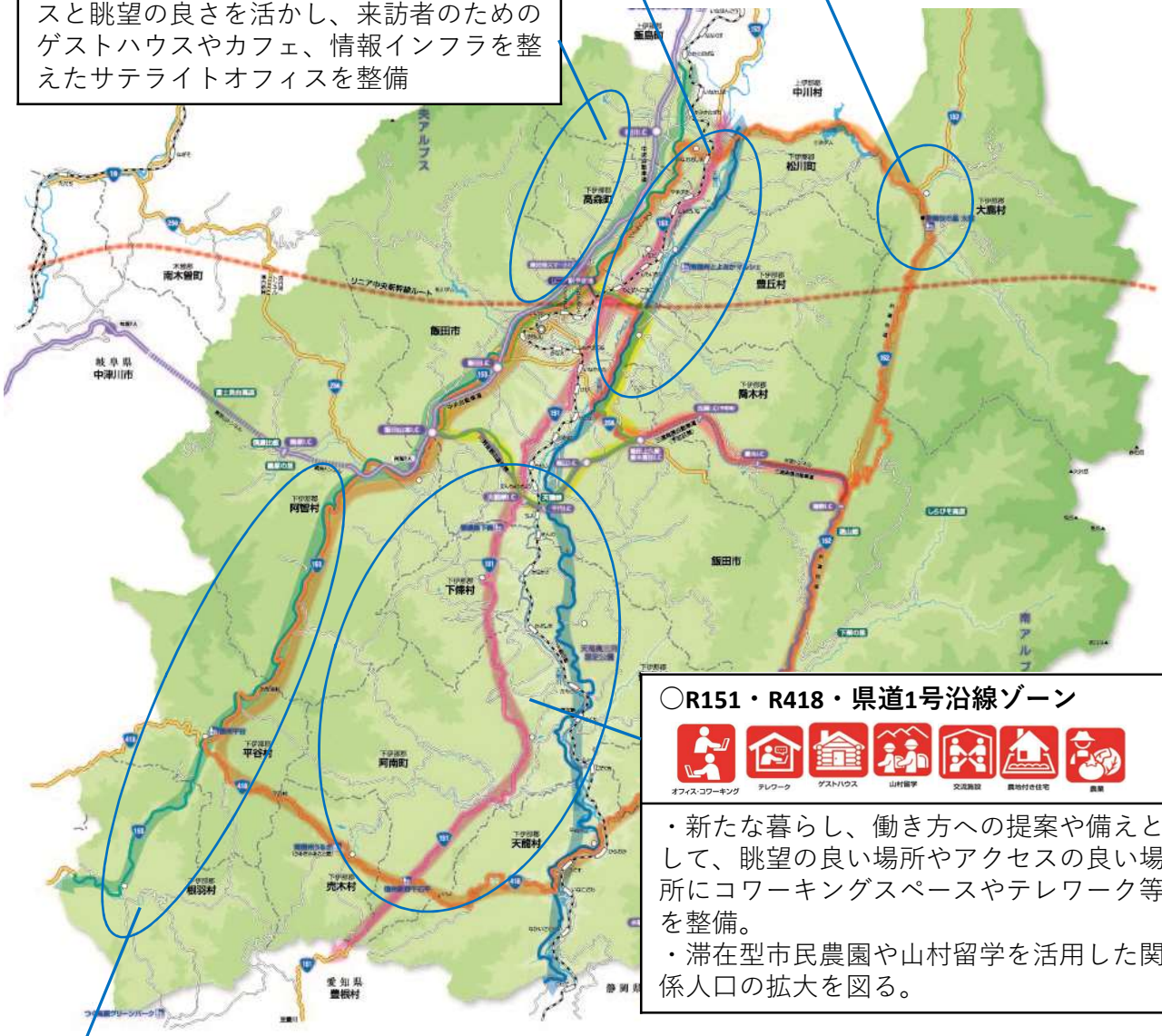
・大学やエスバード等、若者を中心とした交流の場
・天竜川周辺の平地には工業団地があり、研究機関を含めた新たな企業誘致を図る。
・竜東側の段丘は眺望の良さを活かした農地付き住宅やサテライトオフィスを整備し移住につなげる。

○山岳ゾーン

・豊かな自然と眺望の良いエリアに情報インフラの整ったサテライトオフィスを整備

○段丘上段ゾーン

・高速道路ＩＣやリニア県駅からのアクセスと眺望の良さを活かし、来訪者のためのゲストハウスやカフェ、情報インフラを整えたサテライトオフィスを整備



○R151・R418・県道1号沿線ゾーン

・新たな暮らし、働き方への提案や備えとして、眺望の良い場所やアクセスの良い場所にコワーキングスペースやテレワーク等を整備。
・滞在型市民農園や山村留学を活用した関係人口の拡大を図る。

○R153・R256沿線ゾーン

・幹線道路沿線の豊かな観光資源を活かした中長期的滞在プログラムを構築するとともに、情報インフラやゲストハウス等を整備し、定住につながる関係人口の増加を図る。

■観光・レジャーの分野【緑】

○天竜川周辺＆段丘ゾーン

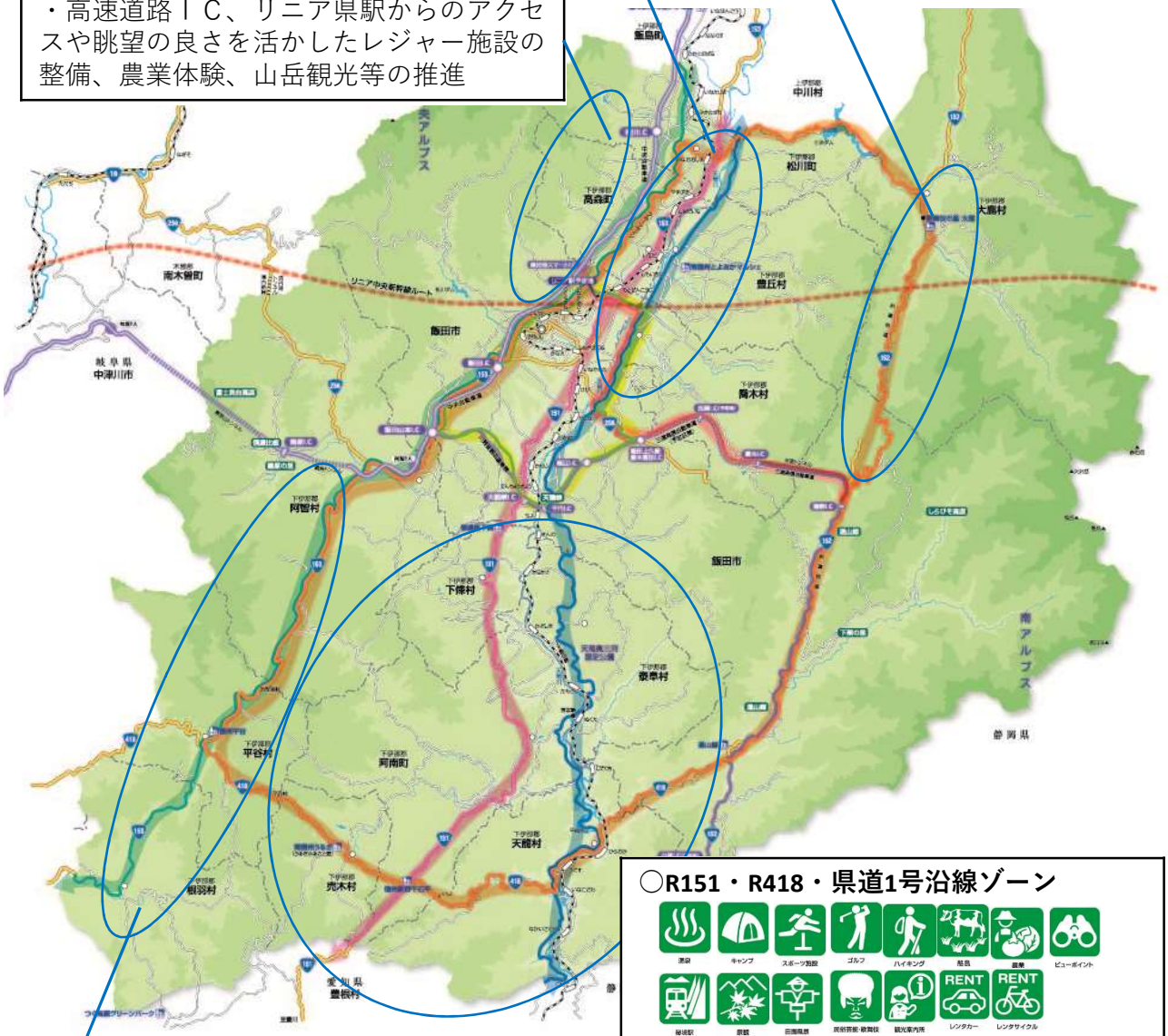
・天竜川でのリバースポーツや、田園風景を楽しみながら流域を周遊できるサイクリングロードの整備
・眺望の良い段丘は、農業体験のほかリニアビューポイントやグランピングなどの体験施設を整備

○山岳ゾーン

・地域に根付く伝統芸能の里
・南アルプス登山口など山岳観光の拠点として、キャンプ、サイクリング、山岳トレイルを等を整備

○段丘上段ゾーン

・高速道路ＩＣ、リニア県駅からのアクセスや眺望の良さを活かしたレジャー施設の整備、農業体験、山岳観光等の推進



○R151・R418・県道1号沿線ゾーン

・各町村に点在する温泉施設を拠点として、その周辺にある保養施設や観光施設と組み合わせることで回遊性を高め、滞在へとつなげる。

○R153・R256沿線ゾーン

・国道153号線と国道256号線の結節点に位置する昼神温泉をハブ拠点とし、多くの観光資源を結ぶ周遊型観光を推進する。

資料 5

経済界（民間）との連携について

伊那谷自治体会議事務局

1　目的

リニア中央新幹線の整備を地域づくりに最大限活用するため、行政と民間がそれぞれ主体的に取組みを推進するとともに、互いに連携した取組みにより、活力のある地域づくりを加速化する。

2　経過

上伊那・南信州地域の企業等が広く加盟する団体に進めるべき取組を照会

【上伊那】

（公財）上伊那産業振興会

○経済団体、企業、東京・大阪・名古屋在住の上伊那出身者、移住者などからの意見を集約

（主な意見・提案　全 103 件）

- 信大、南信工科短大を軸とした教育の充実
- 郷土愛プロジェクトなど先進団体の活動波及
- 自然景観、省資源に応じた環境・景観づくり
- 企業体制強化と新ビジネススタイル創出
- スピード移動/ゆったり移動の見直しと充実
- 様々な既存組織の役割分担と総力の結集
- 知名度アップと周遊滞在型観光の推進

○提案内容をもとに具体的な取組例などの検討開始（Ｒ３.10～）

【南信州】

（公財）南信州・飯田産業センター

○リニアバレー構想に関する企業・団体からの提案をとりまとめ

（主な意見・提案　全 41 件）

- 大学など高等教育機関の誘致
- 都市部からの人材回帰やクリエイティブ人材の対流促進
- 地域企業の競争力強化のための取組
- 独自のライフスタイルを発信できるリニア駅周辺のモデル的な整備
- 異業種の連携による誘客コンテンツの開発

○産業センター事務局と地域振興局において提案内容を整理（Ｒ３.10～）

3　今後の進め方

団体事務局と伊那谷自治体会議事務局において、提案のあった取組の実施内容、事業主体を明確にするための意見交換を実施、対応等を整理

（1）行政と民間が共同して取組むもの

→リニアバレー構想の追加すべき視点に反映

→役割分担、実施主体を整理、具体的取組の方向性を検討しＷＧを立ち上げ

→試行的に取組を実施

（2）上伊那・南信州の経済界が共同で取組むもの

※経済界において連携方法・進め方等を検討

（3）上伊那・南信州の経済界がそれぞれ取組むもの

※経済界において進め方等を検討

リニアバレー構想実現プラン　基本方針

参考資料　1

伊那谷の「課題」と「可能性」

社会の変化

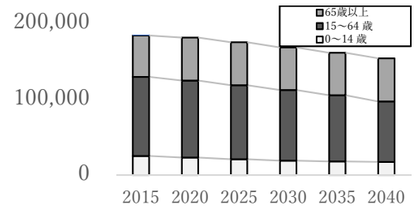
- 急激な人口減少・高齢化、首都圏への人口流出
- 生産年齢人口の減少
- Society5.0 の実現で経済社会が大きく変貌（製造系雇用の減少、IT人材の不足）
- 世界経済に占める日本経済の地位低下
- 「物の豊かさ」から「心の豊かさ」への価値観の変化
- 求められる教育環境の変化

地域経済の課題

- 人口減少・流出。高齢化率が高く、地域の担い手が不足
- 豊かな自然環境が移住、観光誘客等に活かされていない
- 外国人旅行者数が少ない。日帰り観光が多く、一人当たり観光消費額が少ない
- 自家用車以外の移動手段が脆弱
- 国内外で、この地域の認知度が低い
- 全産業に占める情報通信業の割合が低い

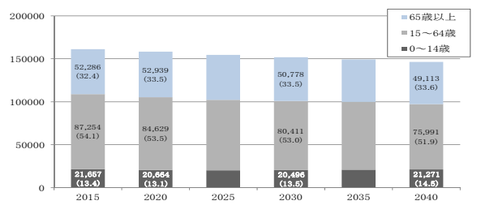
域内人口の減少 ⇄（地域の衰退）**域内経済の縮小**

【上伊那地域の人口推移】



（注）2015 年は国勢調査、2020 年以降は社人研準拠推計

【南信州地域の人口推移】

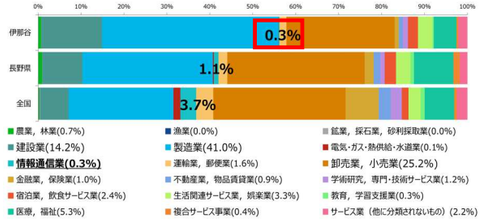


（注）2015 年は国勢調査、2020 年以降は社人研準拠推計

【リニア開業後の長野県駅への交通手段】
（伊那谷居住者の意向）

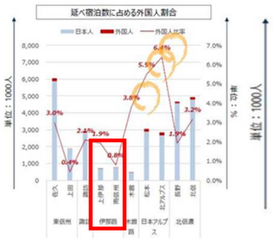
出典：リニア中央新幹線長野県駅とのアクセスのあり方調査事業報告書（平成 29～30 年度実施）

【産業大分類別に見た売上高（企業単位）の構成比】

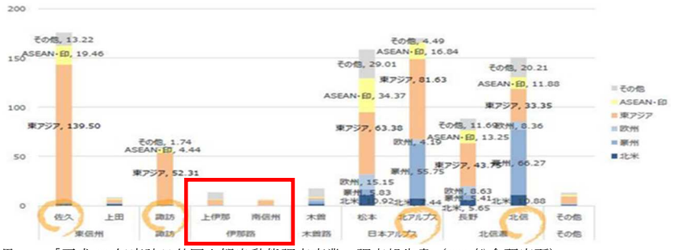


出典：ＲＥＳＡＳ（総務省・経済産業省「経済センサス－活動調査」再編加工）

【延べ宿泊数に占める外国人割合】



【主要６地域からの訪日外国人延べ宿泊数】



出典：「長野県観光地利用者統計調査結果」、「平成 30 年度訪日外国人観光動態調査事業」調査報告書（JTB 総合研究所）

リニア開業に伴う今後の可能性

1　大都市圏と同一の交通圏

2　都市空間と自然環境空間が近接

3　リニア、高速道路、北陸新幹線で「本州中央部広域交流圏」を構築

4　国際空港、国際戦略港湾へ1時間でアクセス

- ***新たなライフスタイルが実現することにより、移住・二地域居住が促進***
- ***インバウンドを始めとする観光客が増加、観光消費額が増加***
- ***新たなヒトの流れが創出されることにより、産業・研究・人材育成等が促進***

伊那谷地域の４つの可能性（目指すべき方向性）

人口減少に負けない持続可能な地域をつくる
～大都市圏にない地域の価値を見出し、創り出し、磨き上げよう～

1　雄大なツインアルプスと天竜川が織りなすダイナミックな自然環境を活かす

2　良好な自然環境のもとで生活しながら大都市の利便性を享受できる立地を活かす
（東京は行くところ！
伊那谷は住むところ！）

3　国際空港、三大都市圏等へのアクセスの良さを活かす
（国内外からヒト・カネを引き付ける）

4　リニアがもたらす新たなヒト・情報の流れを、産業・研究・人材育成等に活かす

伊那谷地域の戦略的チャレンジ（具体的な取組）

豊かな自然環境と地の利を活かした持続可能な地域づくり

1　伊那谷で暮らす魅力をつくり、定住人口を増やす

① 景観形成、共通サイン整備
【三風の会＋南信州広域連合】

≪三風デザイン HP≫

② 広域二次交通の整備【行政＋民間事業者】
（県交通政策課・地域振興局で枠組みを構築）

③ 移住定住・二地域居住のための住環境整備
【市町村】

④ 自然を活かした教育環境の充実　【市町村】

≪郷土愛プロジェクト HP≫

⑤ 将来を担う世代が地域企業を知り、郷就につながるキャリア教育の拡充　【企業・経済団体＋市町村＋地域振興局】

2　国内外から人を惹きつける地域をつくる

⑥ 周遊滞在型観光コンテンツづくり・受入環境整備
【広域 DMO＋観光機構】

⑦ アルプス等自然環境の活用　【県環境部】

⑧ 伝統文化の保存継承、活用【南信州広域連合】

⑨ 国際交流・語学教育の推進　【市町村】

≪周遊滞在型観光コンテンツイメージ≫

② 広域二次交通の整備【行政＋民間事業者】（再掲）
（県交通政策課・地域振興局で枠組みを構築）

3　地域を支える産業の活性化

⑩ グローバル企業の本社・中枢機能の立地促進
【県産業労働部・地域振興局＋市町村】

⑪ 大都市圏の研究機関や企業の本社機能などの移転促進
【県産業労働部・地域振興局＋市町村】

≪ネスレ本社：国土のグランドデザイン 2050 から≫

⑫ 産・学・官・地域の人的交流の場（ナレッジスクエア）の形成
【市町村】

⑬ 地元産業の育成・高付加価値化　【経済団体・市町村】

⑭ 産業を支えるインフラ整備　【県・市町村等】

⑮ 農畜産業、食品産業等の活性化（アグリイノベーション）
【伊那谷アグリイノベーション推進機構・JA・市町村】

⑤ 将来を担う世代が地域企業を知り、郷就につながるキャリア教育の拡充　【企業・経済団体＋市町村＋地域振興局】（再掲）

赤字：リニア開業に向けて、各機関が連携して喫緊に取り組むもの
黒字：既に取組が行われており、各機関において進めていくもの
※【】内は各取組の主体（事務局）となる機関

参考資料 2

リニアバレー構想
～信州・日本の伊那谷から世界の INA Valley へ～

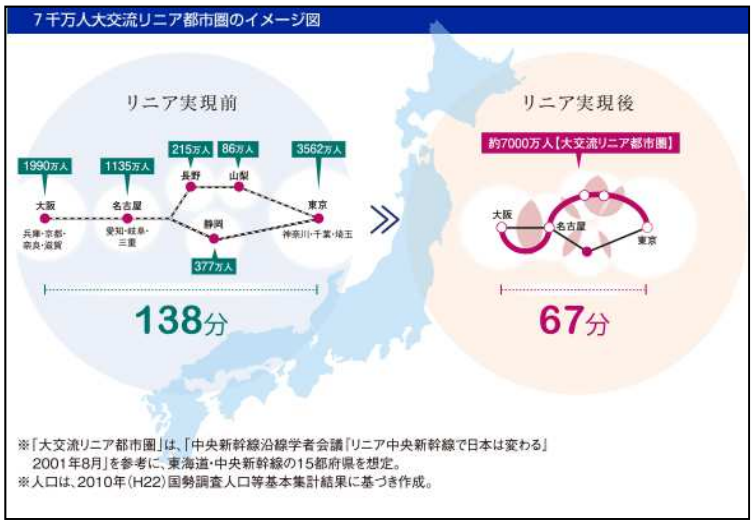
リニア中央新幹線整備を
地域振興に活かす伊那谷自治体会議

1　はじめに

➢ リニアが伊那谷にもたらすもの

○リニア中央新幹線は、その超高速性により国土構造の変革をもたらす国家的見地に立ったプロジェクトである。この新幹線により、三大都市圏がそれぞれの特色を発揮しつつ一体化し、世界最大のスーパー・メガリージョンが形成されることになり、４つの国際空港、２つの国際戦略港湾を共有した、世界から人・モノ・カネ・情報を引き付け、世界を先導していく地域に変貌する可能性が生まれる。

《スーパー・メガリージョンの形成》



（出典）リニア中央新幹線建設促進期成同盟会ホームページ

○リニア中央新幹線により三大都市圏の主要拠点が約１時間で結ばれることを受け、長野県が大都市圏と同一の交通圏に含まれることとなる。
さらには、人の移動といった輸送面のみならず、都市圏との新たな人の流れが創出されることにより、飛躍的に知の集積も進むことになり、産業・研究・人材育成など各分野の構造に大きなインパクトを与える。

《ナレッジ・リンクの形成》

（出典）国土のグランドデザイン２０５０

《高度な都市空間と大自然に囲まれた空間が
近接した新しいライフスタイルが実現》

○リニア長野県駅の活用により、これまで都会から短時間でのアクセスが困難だった地域への人の流れを生み出し、優れた景観や自然環境との日常的な触れ合いを可能にするなど、高度な都市空間と大自然に囲まれた空間が近接した新しいライフスタイルが実現する。

《本州中央部広域交流圏のイメージ》

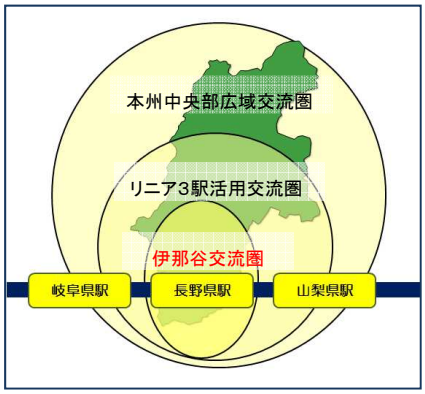
○リニア中央新幹線と北陸新幹線、並びに高速道路網の整備により、東日本と西日本、太平洋と日本海を結ぶ「本州中央部広域交流圏」が本県を中心に構築され、それが災害に強い国土づくり、田舎暮らしの促進による地方への人の流れの創出につながる。
また、東京一極集中からの脱却にも寄与できる。

（出典）長野県新総合交通ビジョン

➢　長野県リニア活用基本構想との関係

「長野県リニア活用基本構想」では、右図に示した３つの重層的な交流圏を構築することによって、交流人口の拡大などリニアの整備効果を最大限に発揮させていくことを想定している。

リニアバレー構想は、リニア長野県駅の駅勢圏である「伊那谷交流圏」を今後どのように形成していくかの指針となるものである。



（出典）長野県リニア活用基本構想

2　リニアバレー構想が目指す姿

平成 39 年にリニア中央新幹線の中間駅が伊那谷に設置される。

この地域が、リニアの整備効果を最大限に活用して、地域発展の原動力とすることで、身近になる大都市や世界の活力を引き寄せ、豊かな自然環境の中で地域も人々も輝く「リニアバレー」を実現する。

Ⅰ　国際空港へ１時間でアクセスするグローバル活動拠点
　　～世界とつながる～
Ⅱ　巨大災害時のバックアップと食料・エネルギーの新しい供給拠点
　　～日本を支える～
Ⅲ　高度な都市空間と大自然とが近接した「対流促進圏域」
　　～ここで豊かに暮らす～
Ⅳ　世界から人を呼び込む感動フィールド
　　～ここでふれあう～

Ⅰ　国際空港へ１時間でアクセスするグローバル活動拠点　～世界とつながる～

○首都圏と中京圏との中間に位置することに加え、アジアや欧米諸国の主要都市への玄関口である東京国際空港や中部国際空港へのアクセスが１時間程度となる。伊那谷では、特に東京国際空港へ東京近郊感覚でアクセスが可能となることや、恵まれた自然環境と高い精密加工技術を有する企業集積があることなどの特徴を踏まえ、外資系企業やグローバル経済圏で活動する企業の中枢機能の受け皿を目指すとともに、既存の産業集積を活かした次世代産業の創出を目指す。

≪目指す姿を実現するために≫

・国際空港への近接性を活かすとともに、創業支援やビジネスマッチングの取り組みを進めることで、外資系企業やグローバル経済圏で活動する企業の本社、研究開発機能などの中枢機能の立地を促進する。さらに、リニア中央新幹線の開通に伴うメリットを既存産業の活性化につなげることで、高度な都市生活と豊かな自然環境が共生する新しい企業集積地を目指す。

・最先端産業や地場産業の支援機能、大学連携組織、高等教育機関などを結集させることにより、産・学・官・地域の人的交流の場、ナレッジスクエアを形成し、「知」と「産業」の集積を進める。また、これらの推進に当たっては、産学官など関係者の連携により、基盤となる事業や中核となる体制づくりについての研究を進め、その成果を発信することで、グローバル活動拠点としての優位性につなげていく。

・国際戦略総合特区「アジア№１航空宇宙産業クラスター形成特区」の指定を活かしつつ、アジア最大級の航空宇宙産業集積地である東海地域と伊那谷とのアクセス向上により、技術連携を進め、本県の強みである微細精密加工技術を活用した航空宇宙産業クラスターの形成を促進する。

・健康・医療・介護分野への企業の新規参入を促進するとともに、県看護大学や地域の医療機関をはじめとする関係機関等との連携を深め、新たな医療系食品の研究や医療機関からのニーズを反映した医療機器の開発、医療に携わる者の人材育成・確保のための取り組みなどを進めることにより、健康長寿社会を支える産業集積（メディカルバイオクラスター）を目指す。

Ⅱ　巨大災害時のバックアップと食料・エネルギーの新しい供給拠点　～日本を支える～

〇首都直下地震の発生リスクが高まる中で、首都圏と中京圏の中間に位置し、かつ大都市圏との移動時間が短いという地の利を活かして、都市機能や政府系研究機関の移転、企業の中枢機能のバックアップ施設や災害発生時の食料供給・医療提供の拠点の受け皿などにより、日本を支える役割を目指す。

〇農産物の付加価値を高めるアグリビジネスの推進や森林資源の活用など、伊那谷の多様な資源を活用することにより、食料やエネルギーなどの新しい供給拠点を目指す。

≪目指す姿を実現するために≫

・優良な農業環境や豊富な水資源を有し、内陸県であって津波の被害を受けないなど災害に対して強みを有している伊那谷の特性を十分に検証することで、首都直下地震発生時に日本を支えリスク分散を図る地域として強くアピールし、研究機関や企業の本社機能など都市機能の移転を促進する。なお、これらの推進に当たっては、関係機関で先進事例の研究や課題の整理などを行い、災害時のバックアップ拠点として、都市部から求められる地域像について検討する。

・巨大災害発生により首都圏にある本社機能が被災しても円滑に事業活動が継続できるよう、企業経営者の居住地等を整備する。

・地域医療の体制・連携を更に充実させることにより、発災時の後方医療支援拠点、災害活動拠点としての機能整備を図る。

・県の道路ネットワーク構想を補完する形で市町村道等の道路網構想を策定し、日常の道路交通の確保を図るとともに、災害時の緊急輸送ルート確保のための道路整備や橋梁の耐震補強に取り組む。また、土砂災害対策など、圏域をあげての防災力向上に取り組む。

・伊那谷に位置する大学等の知的財産を活用した産学官連携による、農畜産業、食品産業及び関連産業を活性化するための取り組み（アグリイノベーション）を進める。また、地域在来の農林産物や食文化の特性を改めて見直し、農産物の新たなブランド化、伊那谷の特産品を活かした６次産業化など付加価値の高いアグリビジネスによって、健康長寿県における食をメインとした伊那谷モデルを構築し地域の魅力を高める。

・ヒノキ、アカマツ、カラマツなど伊那谷の多様な樹種を活用できるよう、各機関が連携し、木造住宅の建設を図るための木材の安定供給体制の構築や森林環境保全、木質バイオマスの利活用の推進、森林整備の担い手の確保・育成などに取り組み、林業振興を進める。

Ⅲ　高度な都市空間と大自然とが近接した「対流促進圏域」　～ここで豊かに暮らす～

○「高度な都市環境の中で働き、大自然に囲まれた環境の中で暮らす」、「平日は大都市圏に住んでいても、週末や一定期間に限って豊かな自然環境の中で伝統文化に触れて暮らす」など、新しいライフスタイルを提供する「対流促進圏域」を形成する。

○伊那谷の伝統文化や自然環境を守るなど、住民が伊那谷で豊かに暮らすための取り組みを進める。

≪目指す姿を実現するために≫

【移住定住・二地域居住の促進】

・都市圏での二地域居住に関する意向調査や他都市の先進地事例の情報収集、新たな生活モデルの提案などについて、広域連合や定住自立圏の枠組みを活用し、研究を進める。

・伊那谷を「思考活動・憩い・住居の場」と位置付けた上で、「東京・名古屋への通勤ゾーン」「二地域居住ゾーン」など、様々な居住ニーズに応じた圏域内のゾーニングについて検討を進める。

・リニア長野県駅へのアクセス環境に応じて、分譲地の整備や空き家の改修、相談体制の充実など、定住や二地域居住に必要な環境の整備及び各種支援策の検討を進めるとともに、ＵＪＩターン希望者や首都圏の学生などへのきめ細やかな情報提供を行う。

・都会で生まれ育った人たちに対し、自然エネルギーの活用によるエコロジーに着目した生活スタイルやクラインガルテンでのお試し居住を提案していくなど、定住につながる取り組みの充実を図る。

【豊かに暮らすための地域づくり】

・我が国を代表する伊那谷の伝統文化の保存と継承に向けた活動を進め、郷土意識の醸成や担い手の育成・確保に努めるとともに、誇りある資産として地域の活性化に活かしていく。

・特色ある食文化を背景とした健康長寿に向けた取組、子育てしやすく、子どもたちの希望がかなう教育環境の整備、地域の子どもたちへの郷土愛の醸成など、様々な視点から伊那谷に住む人が豊かに暮らすための地域づくりを推進し、新たな文化の創造につなげる。

・これらの取組を通じ、将来的に伊那谷を支える人材を育てるとともに、若者を引き付ける魅力ある地域を目指す。

【魅力ある自然環境の保全と景観の形成】

・南アルプスの世界遺産への登録や中央アルプスのジオパーク認定に向けての取組、中央アルプス県立公園の国定公園への格上げに向けた研究などを通じ、アルプスや里山の山並み、段丘や田園風景など伊那谷の美しく雄大な自然環境を守り、地域の宝として育て活かしていく。

・恵まれた自然や先人により育まれた歴史・文化が織りなす町並みなど、伊那谷地域が誇る美しく豊かな景観を守り継承するとともに、リニア整備を契機として新たに創り出される景観が魅力あるものとなるよう、広域的な看板デザインのルール化や屋外広告物の規制にも取り組み、調和の取れた景観の形成を目指す。

Ⅳ　世界から人を呼び込む感動フィールド　～ここでふれあう～

〇南アルプス、中央アルプスといった山岳高原や多彩な伝統文化を活かして、美しい信州の原風景や文化にふれあうなど、インバウンドも含めた広域観光の推進により交流人口が拡大する感動のフィールドを目指す。

≪目指す姿を実現するために≫

【広域観光ルートづくり】

・自治体、観光協会、観光関係団体、旅行事業者等で構成する協議会等を設置し、木曽路をはじめ他の観光地と結んだ旅の提案や北陸新幹線との連携など、広域的な信州の旅を満喫できるよう、日本アルプスの玄関口としての役割が期待されるリニア長野県駅を拠点とした多様な観光ルートづくりに取り組む。

・交通事業者と連携し、リニア長野県駅からの二次交通の確保・整備を進める。

【体験型観光の推進】

・観光協会や民間事業者等と連携し観光資源の掘り起こしを進め、豊かな里山資源を活用した山菜・きのこ狩り体験や農業体験、田舎暮らし体験、登山・山岳散策をはじめとするアウトドアスポーツなど、魅力ある多様な体験ツーリズムを確立する。

・健康志向の高まりの中で、豊かな自然環境、温泉、農産物を活かし、健康に関心を持つ多くの方に訪れていただくよう、ヘルスツーリズムを推進する。

・全国に先駆けて実施した、生活文化を活かした体験修学旅行を更に発展させ、フィールドスタディの誘致を促進する。

・コーディネーターなどの担い手の育成や効果的な情報発信のあり方など、体制整備について検討する。

【外国人旅行者の誘客】

・マーケティング調査によるトレンドの把握等を通じ、伊那谷の伝統・文化を活かした観光資源を磨き上げ、観光地や宿泊施設の魅力向上、滞在プログラムづくりなど、外国人旅行者に対する訴求性を持った観光ルートの形成に地域をあげて取り組む。また、海外へのプロモーションについても検討する。

・外国人旅行者が安心して快適に移動・滞在することができるよう、観光情報の一元化や情報発信に向けた広域的な連携を進めるとともに、案内標識やパンフレット等の多言語化、公衆無線 LAN 環境の整備など、得たい情報へのアクセスが容易になるような仕組みを検討する。

【豊かな自然と実績を活かした国際交流】

・独立行政法人国際協力機構・青年海外協力隊訓練所を拠点としたグローバル人材の育成、在日大使館との連携を進めるとともに、国の内外から様々な会議を誘致するなど、豊かな自然環境や伝統文化を活かした国際交流を推進する。

・リニア時代に地域の主役となる子どもたちへの国際理解教育や語学教育を進める。

3　構想実現のための基盤整備

〇リニアバレー構想の実現に向け、長野県の南の玄関口となるリニア長野県駅を多くの人々にとって利用しやすい駅とするため、県内外の広範な地域からの多様で良好なアクセスを確保する。

〇こうした整備を進めることで、伊那谷の人口のおよそ８５％が東京圏９０分圏域、６０％が名古屋圏６０分圏域となるようにする。

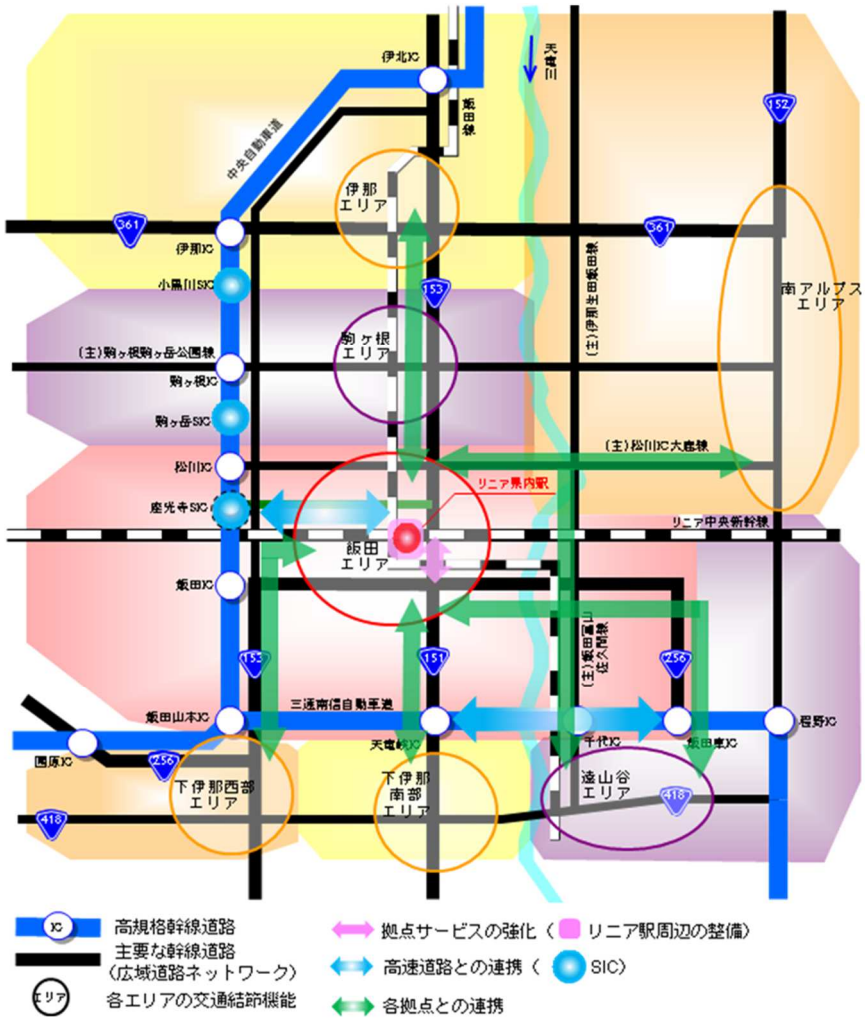
➢　目指す姿を実現するために

・三遠南信自動車道等の整備や高速道路とリニア長野県駅との直結、スマートインターチェンジの設置など、リニア長野県駅と高速道路との連携を強化するとともに、拠点間を円滑に結ぶ幹線道路を整備するなど、伊那谷の広域道路ネットワークを構築する。

・リニア長野県駅からの乗換を円滑に進めるため、駅周辺の広場や道路の整備を図るとともに、二次交通の整備など、住民や観光客の利便性向上に向けた取組みを進める。

・ＪＲ飯田線への乗換新駅設置の検討や、リニアのダイヤに合わせた在来線運行体系の実現に向けた調整など、リニア長野県駅とＪＲ飯田線との連携に向けた取組を進める。

《広域ネットワークのイメージ図》



※図は『リニアを活かした「地域づくり勉強会」』検討成果から抜粋